文化財見学シリーズ13

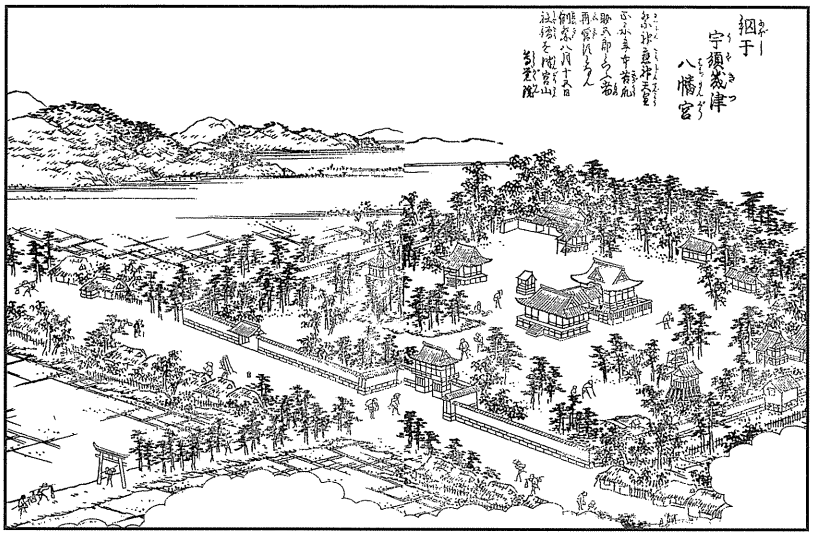
姫路市教育委員会文化財課（昭和59年９月１日発行）
姫路市教育委員会文化課（平成15年12月１日増刷）

『室津道』をたずねて

（その二）

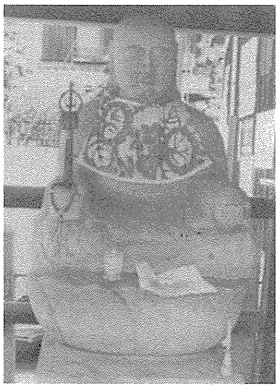
文化財見学シリーズ11では、室津道をたずねて城下から小坂までの道筋と沿道の文化財を紹介した。今回は更に西へ室津道を訪ね、揖保川の渡しまでの道筋にある文化財を紹介しよう。左の絵には、魚吹八幡神社の門前を通る室津道が描かれている。

（播州名所巡覧図絵より）



西土井構居　古い民家の続く南側を堀田と呼ぶ、現在宅地化されているが、もとは湿田で堀の一部だといわれていた。『播磨鑑』に西土井構居、領主赤松八左衛門とあるのは、この家々の辺りと考えられる。

日本回国地蔵　西土井の西はずれにあり、台石に「日本回国」や「享保」の文字が見える。年号は不明だが、地蔵前の石燈籠には享保14年（1729）の年号があって、地蔵も同年のものとみられる。日本回国の記念に奉納したものであろう。市内には八重畑、国分寺境内、四郷町山脇、白浜町に、日本回国塔や日本回国石仏がある。


日本回国地蔵

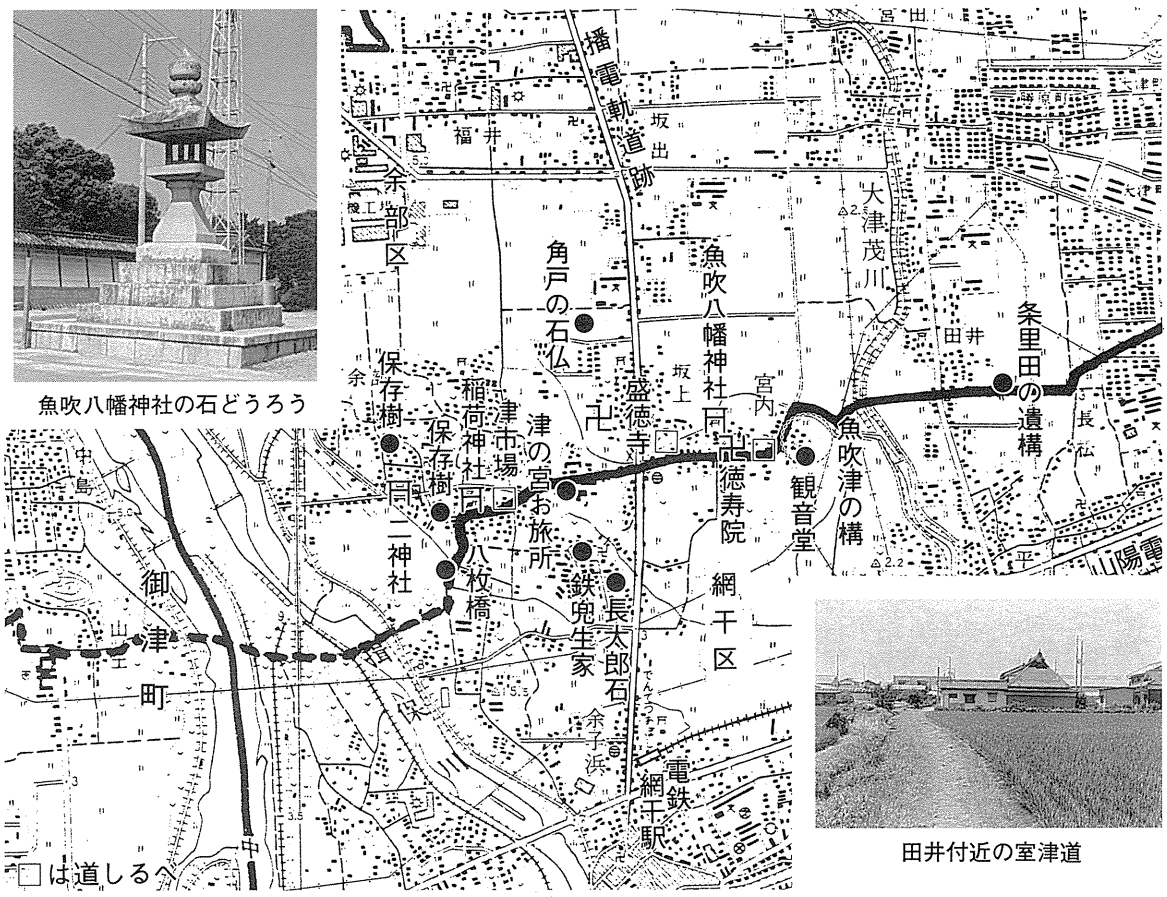
西土井の六地蔵　汐入川公園の東側に数基の墓石と並んで六地蔵がある。その１つに享保14年（1729）の銘があり、市内の六地蔵としては古い方である。

田井の条里田遺構　田井の南端を東西に通るあぜ道が室津道である。この辺りは揖保郡の条里田の南限であり、田は整然と区画され、条里の遺構を示す。

魚吹（うすきっ）津構　宮内の東端部、字殿垣内は堀跡とみられる溝が走る。英賀城史にある魚吹津構は、ここであるとみられ、この構は、垣内村の合田助九郎が構主で天正８年（1580）に落城したという。殿垣内の中ほどに、観音堂があり、揖保西国33ケ所の１つである。

西土井の六地蔵

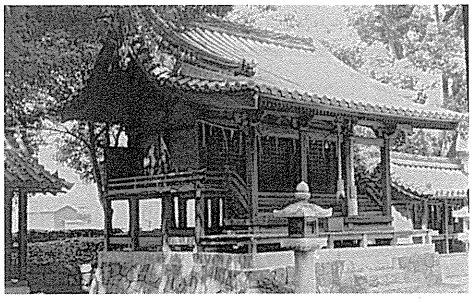
魚吹八幡神社の石どうろう



田井付近の室津道

徳寿院　本堂は小規模であるが、18世紀前半に魚吹神社の神宮寺本堂として建立されたもので、貴重な建物である。薬師堂は、本尊台座に津宮山魚吹寺別当徳寿院円秀の名と元禄14年（1701）修複の年号があり、建立もその時と考えられる。境内隅に手洗石があり、そばの石碑に文政３年(1820)の水争いの時、13代社僧法道が解決に力を尽した記念のものと記されている。

魚吹八幡神社楼門

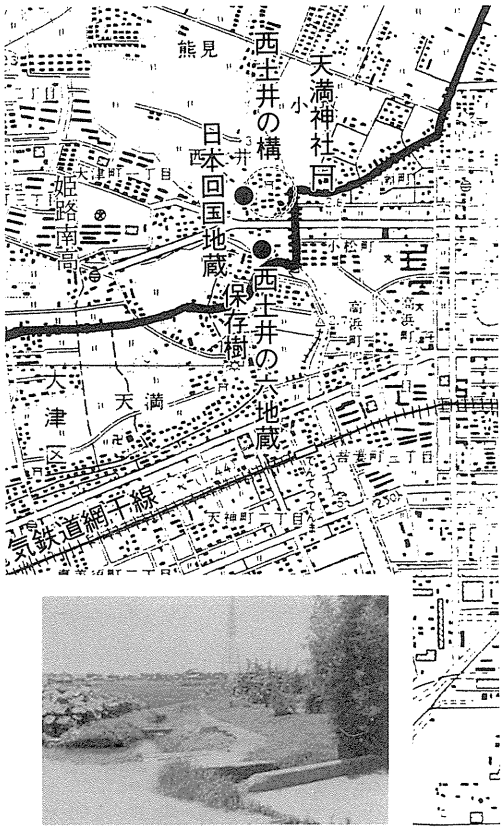


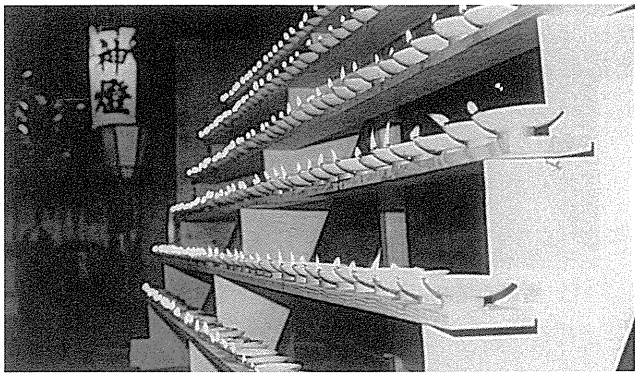
魚吹八幡神社　摂社敷島神社

魚吹八幡神社　由緒には、創祀は仁徳天皇７年或は神亀２年（725）とあり、『峯相記』には貞観２年（860）建立とあって創立年代は、はっきりしない。『播磨国風土記』には宇須伎津の名のおこりが説明されているので神社もこの地が開発された古い時期に創立され、荘園時代に石清水八幡社の別宮となり、魚吹八幡神社と呼ばれるようになったようである。祭例行事として秋祭りのほか、元旦の千本突、７月14日の千灯祭・10月21日の宵祭の御旅提灯など珍らしい。

〔**楼門**（ろうもん）〕棟札や瓦銘から貞享３年（1686）の建立という。規模が雄大で、細部の手法にすぐれ、播磨地方に多い神社楼門の代表的建物である。三間一戸八脚門の形式。県の指定文化財である。

〔**敷島**（しきしま）**神社**〕本殿裏の摂社で、旧本殿を移したものといい、記録にある正保２年（1645）建立の本殿はこれだとみられる。小規模ながら細部手法に古制を伝える遺構で三間社流造・県指定文化財である。





千灯祭（増田重信氏撮影）

長松北方の室津道

魚吹八幡神社手洗石

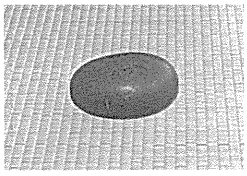
〔**絵馬**〕拝殿に網干の豪商らが奉納した天保10年（1839）の虎図・天保11年（1840）の祭礼図、弘化４年（1847）の中国官女図などがかけてある。

〔**力石**〕国旗掲揚塔の下に大小6個の小判型石があり、その1つに持ち上げた5人の名が刻んである。

〔**保存樹**〕境内のオガタマノキ（モクレン科）および神社の森は市指定の保存樹である。

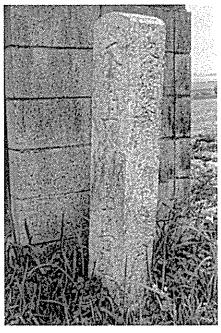
〔**その他**〕以上の他に、楼門前には文政４年（1821）建立の巨大な常夜燈があり、門を入ると右手に高さ 2.5m 余の百度石がある。天保12年（1841）のもの。井戸枠と手洗石は天保13年（1842）の年号と泉州堺の文字や商人名が彫られている。本殿前の狛犬は文化14年（1817）のもの、本殿裏の敷島神社前の石燈籠は慶安４年（1651）のもの。

角戸（つのど）の石仏と文覚寺（もんがくじ）跡と盛徳寺　旭陽小学校の南西の田のあぜに３体の石仏があり、３体とも舟形光背をもつ半肉彫坐像で鎌倉初期の作とみられる。一説では文覚上人を慕って、この地に来た角戸三郎の菩提を弔うために造ったと言う。付近から布目瓦が出土するので、古い寺院跡でないかと考えられる。文覚上人は、平安末期に、袈裟御前を殺害するに至った己れの非を悔い武士を捨て出家した遠藤盛遠が文覚と名を改めたもので、高雄神護寺の地頭職として福井庄に来、この地に寺をたてたという。その寺跡がここだといい、網干史談会によって、石仏脇に石碑が立てられている。坂上の盛徳寺には、上人の木像が安置され、遺愛の品だという石が伝わっている。

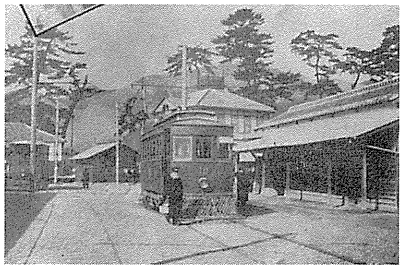


文覚上人遺愛の石

角戸の石仏



文覚寺跡の碑

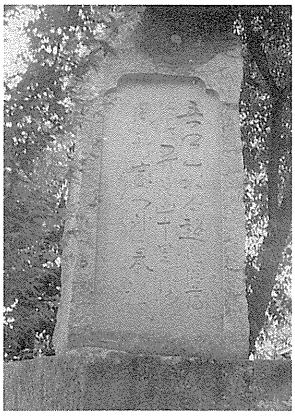


播電の電車（河野孝幸氏提供）

津の宮のお旅所

火揚げ絵馬

長太郎石の碑（石は前の路面にある）



河野鉄兜生家の碑

吾郷山水本超凡　淡蕩煙波開鏡函
十里垂楊風不断　家々門外有春颯

播電軌道跡（ばんでん）　現県道の西側がそれで、津の宮の北方で道の東側に移って電車が通っていた。明治42年觜崎～龍野～網干港間に龍野電鉄（大正９年には播州水力電気鉄道、大正13年には播電鉄道と改称）が通じ、大正４年新宮まで延長したが、昭和９年全線廃止となった。

津の宮のお旅所　津市場の字馬場先に魚吹八幡神社の渡神殿があり、毎年秋の例祭には御輿の渡御が行われ各氏子より繰り出された屋台で賑わう。この周りの土地は、魚吹津（宇須伎津）の港だという場所や、御手洗池（おたらいけ）、塩掻場（しようかくば）、市の山などの地名がある。市の山は今あと形もないが、もと神社があった所といい、塩掻場も清めの水垢離場といわれる。

稲荷神社の絵馬と力石（いなり）　津市場の稲荷神社に元治２年（1865）の祭礼図絵馬がある。この絵馬には、かつてすぐ西の津市場西公園（稲荷河原と呼んでいた）で行われていた火揚げの姿が克明に描かれていて、民俗資料として貴重である。境内に力石も数個ある。

河野鉄兜の生家と歌碑（こうのてっとう）　生家は余子浜（よこはま）の垣内（かいち）にある。庭に網干という題の七言絶句を彫った石碑が立っている。鉄兜は幕末の詩人として有名、医者でありながら林田藩校敬業館の国学・儒学教授となり、江戸を始め各地をまわって多くの学者と交わった。吉野懐古の詩は有名。

長太郎石　盆踊り歌「網干音頭」に歌われている伝説上の人物、長者の長太郎の邸跡の礎石だという石が、垣内の路上に残っている。

二神社の保存樹（に）　下余部にあり、イザナギ、イザナミ二神を祭る。境内にあるムクノキとエノキは市の保存樹となっている。神社北の八木氏宅のクスも保存樹である。

八枚橋（はちまいばし）　室津道は津市場より南の田の中を通り、揖保川の提防に達する。田の中の小川に八枚の石で橋をかけ八枚橋と呼んでいた。今はその上をコンクリート舗装している。

八枚橋（津市場南方）

13号の編集には次の方々の協力を得ました。
網干区津市場・郷土史家　津田　実氏
姫路市町の学芸員　矢内　澄氏